

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15H04109

研究課題名(和文)台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から

研究課題名(英文) A Study on the Reconstruction of Taiwanese Urban History: From the Perspective of Urban Transplantation, Indigenization and Industrialization

研究代表者

青井 哲人 (Aoi, Akihito)

明治大学・理工学部・専任教授

研究者番号：20278857

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、18世紀から20世紀前半までの台湾中部濁水河流域を対象として、5年間のインテンシブな調査によって、漢人商人資本による領域レジームの編成と、植民地産業資本によるその再編成の具体的な過程を解明し、そのなかに各都市の生成と衰退、分裂と移動、破壊と再生などの動態を捉えた。19世紀までは鹿港商人による河道(線)に沿った領域支配の構築過程であり、20世紀前半は旧式製糖の改良に漢人資本が導入された後、日本企業資本が広大な原料採取区(面)を農業・工業・交通・土地等の経営テリトリーとして分割する体制に至る再編過程である。伝統都市の景観的な差異と変化、近代都市類型の登場も以上の枠組みから再検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の台湾都市史研究は、伝統的な中国式の行政都市・通商港湾都市、そして主要近代都市の都市計画行政やモダニティなどに研究が限定される傾向にあったが、本研究はまず特定の地域の地形的・環境的な条件のもとで一定の地域が社会的・経済的な集団の活動によって領域化されるプロセスを捉えることで、都市史研究の枠組みを根本的に書き換えるものである。これによって、従来なら郷土史の研究以外では軽視されてきた中小都市や小港も視野に入り、一定の領域的全体性のもとに議論できるほか、都市の類型と布置、災害リスク、集団間の抗争と統治権力、インフラ、都市建築の材料・構法的特質の差異や変化なども立体的に検討できることを示した。

研究成果の概要(英文)：This study is an intensive historical study of the Zhuoshui River Basin in central Taiwan from the 18th to the 20th century, in order to elucidate the configuration of the territorial regime by Han merchant capital and the reorganization by colonial industrial capital, and, in this scope, to reexamine the emergence and decline, division and relocation, destruction and regeneration of cities. Until the 19th century, the project to connect every part of the basin along the lines of channel was undertaken mainly by Lukang merchants, while under Japanese rule, after Han capital was introduced to improve numbers of scattered old-style sugar factories in the first stage, a few Japanese corporations took them over and divided the basin into vast areas to manage the sugarcane cultivation, sugar production, transportation and land property. The difference and change in traditional townscape and the appearance of modern type of cities can be reassessed in this perspective of territorial history.

研究分野：建築史・建築論

キーワード：台湾 濁水河流域(河系) 領域史・都市史 災害(水害)・械闘 漢人商人資本 植民地産業資本
製糖 都市改造と町屋

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来の台湾都市史研究には次のような限界があった。

まず 19 世紀までの都市については、突出した行政都市や対岸通商港など一握りの都市に研究蓄積が集中し、河川流通や灌漑農村に結びついた内陸の一般的な都市群は軽視されてきた。漢人集団がいかに台湾の大地に《土着化》したかをその全体性において検討する態度は希薄だった。

また日本植民地期の台湾都市については、都市計画行政の近代化および都市景観・都市社会のモダニティを捉える前提として、19 世紀までの台湾都市の存立基盤を解体・再編した《産業化》の力をみる視点はなぜか希薄であり、やはり地方中小都市は視野から落ちてしまっていた。

対して本研究では、社会的・経済的な集団が一定の支配的体制を確立するとき、それは一定の形態的・環境的特徴をもった大地の「領域化」をとともなはずだという視点を導入する。研究過程で「領域レジーム」という造語をつくることにしたが、特定地域を対象にその編成および再編成の過程を明らかにしながら、そのうちに都市の形成・変容を見ていくのが本研究のねらいである。また、この観点からは、もうひとつの都市存立条件としての災害を視野に入れることとなる。

代表者は、あいつく激甚災害や人口減少・産業構造転換のなかで、これまで都市の不安定性や流動性に注目した研究を展開してきたが、その延長上に上記の課題を立てるに至ったとも言える。またこの視点は、近年の都市史から領域史への展開と呼応するものでもある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、台湾中部の濁水河流域を対象として、5 年間のインテンシブな調査によって、18・19 世紀から 20 世紀前半までの領域レジームの編成・再編成とそのなかでの都市形成を明らかにすることである。サブ・テーマとして下記を掲げて研究に取り組んできた。

- (1) 清朝期の地域・都市開発の領域史的特質の解明
- (2) 植民地期の地域・都市開発の領域史的特質の解明
- (3) 清朝 / 植民地期における域内諸都市の類型別立地モデルの構築
- (4) 対象都市の各時期の景観復元
- (5) 領域編成・再編成に伴う社会構造的な転換の解明
- (6) 華南(中国東南海岸地方)の都市との比較

簡潔に要点を説明しておくなら、(1)では漢人の商人資本、(2)では植民地の産業資本(糖業資本)が、それぞれ鍵をにぎる。その活動が、地形や気象という具体的な限界条件のなかで一定の領域的レジームを編成していく。この観点から、個別都市の性格と相互関係、都市の計画や建物の構法的特質なども従来とは異なる検討が可能になる。

3. 研究の方法

台湾島は九州ほどの大きさの島であり、中央山脈が南北に走り、東は深い海溝まで一気に落ちるが、南から西そして北は中央山脈に発する幾筋もの主要河川が形成した沖積平野が互いに連続しながらとりまいている。19 世紀までに漢人が入植したのは、こうした流域の平野部から中山間地域までであり、濁水河流域もそのひとつである。この段階までに同流域に立地した主要都市を次のように仮説的に整理し、これを書き換えるかたちで調査研究を進めた。

- A 内陸扇縁部：行政都市(県城)
- B 沿海扇縁部：沿海河港都市(対岸貿易港)
- C 内陸扇央部：内陸河港都市(内陸中継港)
- D 扇頂部：谷口河港都市(山地資源集散拠点)

詳しくは後述するが、領域レジームの編成を見る上で都市の類型と関係がひとつの着眼となりうると考えたのである。

個別都市の研究は、地方史類および先行研究を参照し上記フレームに沿って総合化した。部分的ながら嘉慶年間の史料を用いた実証的成果も上げることができた。また本研究代表者らの独自の蓄積に基づき、地籍図・建物登記簿と実測による復元的研究と史資料を組み合わせる都市調査も行っている。植民地期の製糖産業の展開については、研究分担者の辻原万規彦を中心に、空中写真、新聞、糖業各社史等の資料を活用した領域史的成果をあげている。

4. 研究成果

4-1 都市群のアリーナ

本研究では、上述の都市類型布置の仮説に出発し、個別都市の研究蓄積に加え、地方史の記述や国史館編纂地名辞書によって小都市・小港等の知見を豊富化した。ここまでに明らかになったことがらを以下に記す。

(1)1723 年彰化県設置後、濁水河流域は行政的には A 彰化県城の管轄下にあり、経済的には B 鹿港の経済圏であったとみてよい。清朝は 1784 年に泉州-鹿港を正式航路とした。彰化県城は内陸の八卦山麓にあり、鹿港は鹿港溪河口付近の河港であるが扇状地の周縁にあって、いずれも水害リスクのきわめて低い立地であった。

(2)しかし、それゆえに鹿港は港となる河川の流速が小さく土砂堆積に悩まされ、通商港指定の頃にはすでに河港都市としての存立リスクが表面化していた。地方志に「鹿港の外港」と記され

る小港が沿岸各地に多数みられるのはこのリスクへの適応であろう（新港、溝内、草港、王功、外溝子墘＝三林港、番挖＝芳苑ほか）。これら小港にも盛衰があり、鹿港は実質的に、母都市と小港群からなる広域的・可変的な都市という形態をとっていたと考える。

(3)鹿港は、同じB類型都市で17世紀後半から18世紀初期に隆盛した笨港の後継と見ることもできる。笨港は水害と械闘を繰り返したあげく18世紀後半には漳州人が内陸側に独立の都市・新港を建設するに至るのだが、その頃には港湾機能を弱体化させていた。それと前後して純然たる泉州人都市鹿港が通商港に指定されたことには何らかの意味がある。

(4)C群は、当初は多数の都市の競合を想定していたが、実際には西螺溪の西螺街、東螺溪の東螺街が扇中央部に突出していた。他にも流路に沿う少都市は多数みいだせるが、近在エリアの農産物市場としての役割が大きかったようであり、西螺や東螺が流域の灌漑農村から大陸移出用の米を集めて鹿港に送る、海峡的スケールの結節点であったこととは比べるべくもない。

(5)このうち西螺は台南・鹿港などから進出した泉州系商人が強かったことが他研究者により実証されている。実質的に鹿港の扇中央部拠点としての性格を有していたと考える。

(6)西螺に対し、後発の東螺では漳泉が混じり、18世紀後半に激的な水害と械闘を繰り返したあげく分裂。漳州勢を駆逐した漳州系が19世紀初期に北斗街を新設した（後述）。こうして濁水溪扇中央部には西螺と北斗というふたつの泉州系中継港が鹿港のもとに確立されるのである。

(7)二水で濁水溪から取水して西螺溪以北の広大なエリアを灌漑する八堡圳の建設は18世紀初期（1709～19年）施世榜つまり泉州系資本の巨大事業であった。本研究の着手時点では視野になかったが、この灌漑農村内での都市の生成も領域史的には重要である。その一例として客家人の永靖建街の例を詳細に検討したことは本研究の大きな成果である（後述）。

(8)他方、これらとは別に古い開発の歴史を持つのが扇頂部である。中山間から谷口付近は漳州人が早くから地歩を固めており、流路に沿う小市街の発達（水里、集集、社寮、濁水など）、台地上の林杞埔（鄭成功の遺臣による開発が知られる）の成長が見て取れる。いくつかの断片的事実からは18世紀末から19世紀初期に平野部の漳州人が扇頂部に移る動きが推察される。泉州閩による扇状地支配の進展と平行する動きと考える。

(9)1886年、西螺溪以南が雲林県として独立し、林杞埔に官軍衙が据えられるが、これは樟脳・木材等の山地資源開発と山地原住民統治の拠点とされ、漳州系の利権が生まれる。当初はD類型の林杞埔（後の竹山）を谷口の流通拠点と目していたが、実際には河川流通との関係は希薄であり、商業的流通は河川沿いの小拠点（集集・社寮・濁水等）が担ったことが見えてきた。19世紀後半にここに泉州商人の参入がみられる。これは18世紀後半から19世紀初期の扇中央部にみられた熾烈な闘争と違って、漳州人卓越地域における漳州人の協調的戦略という性格を示す。

4-2 濁水河流域における領域レジームの史的特質

以上から、(a)19世紀初期までに対岸通商港の鹿港が扇状地内の商人資本的支配を固める、(b)逆に扇頂部は19世紀後半に山間事業拠点の性格を強める、(c)同時期に部分的にせよ両者の協調もみられる、といったことが言えそうである。この過程を貫くのは商人資本の論理であったとみてよい。福建省沿岸部の慢性的米不足を背景に、台湾は漢人商人資本によって「福建の穀倉」となるのだが、それは彰化地方では以上のごとき領域レジームの実現であって、19世紀末にはそこに山地資源流通もより安定的・積極的に接合するようになるのだろう。

ところで、彰化県設置時、南の虎尾溪から北の大甲溪まで、すなわち濁水溪の扇状地が県域とされたことは、それまでの諸羅県が台湾北端（雞籠、現在の基隆）までの広漠たるひろがり管轄していたのと違って、明瞭な地形学的まとまりに同定されていることが特徴的である。遡れば、台南の台湾府城と鹿耳門、その北に隣接する嘉義の諸羅県城と笨港は、それぞれ行政都市とその外港、つまりA+Bの関係にあり、これが彰化+鹿港という形でいわば複製された。他方、17～19世紀には、濁水溪河系の主流の座は笨港溪、虎尾溪から西螺溪、さらには東螺溪へと北向きに遷移している。つまり笨港、西螺、東螺という都市の発展順序は、河道遷移を人間集団が追った歴史とみてよいが、この視点からすれば鹿港は主流路の追隨をやめたことになる。もちろん県城との位置関係から決まった立地ともいえようが、いずれにせよ主流路から外れ、泉州勢で固めた鹿港の存在が、18世紀後半から19世紀にかけての流域の編成にとって重要な存在となったのである。これは領域的視点からでなければ気づきにくいポイントである。

ここで、1786年の林爽文事件にも言及しておこう。対清反乱軍を率いた林爽文は漳州人であり、清朝の公式な港となったばかりの鹿港をはじめ、泉州閩の卓越する都市を攻撃した。これが各地で械闘（いわゆる漳泉分類械闘）の激化を招き、台湾は大混乱に陥ったのである。結局、清朝政府は制圧に莫大なコストを要し、以後、台湾統治の強化に向かうのだが、他方で米や塩をはじめとする物価が高騰し、商人の台頭と資本蓄積を促したことも知られている。上に述べた領域レジーム編成は、背景にこうした史的展開を置いて理解されるべきものだろう。

4-3 都市社会の分裂と移動

漳泉の械闘は18世紀末から19世紀初期にたしかに激化したが、本研究がとくに注目したのは東螺街である。東螺は東螺溪に面する台地から西、現在の溪州周辺であり、かつては舊厝社と

いう平埔族のテリトリーだったが、18世紀初期には漢人入植がはじまり、やがて西螺につぐ河川流通拠点として注目され東螺街の成長に至るのだろう。この地域は、記録によれば十年から十数年に一度、都市の壊滅に近い河川氾濫にみまわれたが、そこに械闘が重なる傾向もある。

泉州勢は1806年の水害を機に東螺から東へ動き、東螺溪と清水溪にはさまれる砂州上に、寶斗（のちの北斗）を建街する（その後も水害はたえない）。その中心に創建された媽祖廟「奠安宮」境内に1808年の建街碑が残るのだが、どうやらこの「遷街」より前、18世紀末の時点で漳州勢は東螺から駆逐されたい。これも林爽文事件（1786）による械闘の激化もしくはその戦後処理的な過程の出来事であったとみられるが推測にすぎない。

東螺を追われた漳州勢の動きも不詳だが、彼らは同族ないし同姓の集団に分かれて離散し、谷口もしくは中山間地域の漳州人卓越地域に動いて吸収されたか、独自に農村集落を営むことになったのではなかろうか。1890年（光緒16）に北斗の東方に創建された陳氏大宗祠「聚星堂」の沿革に、興味深い記述がある。すなわち、この大宗祠は濁水渓流域に入植・定着した陳姓の漳州人「望族五美・清揚・志文・紹年諸侯等二十位」が、同郷人たちが苦難とともに築いた道程を想起しつつ創建した合同の家廟を建立したものだといっているのである。大宗祠とは血縁関係を越えた同姓の人々が祖先を合同で祀るものだ。この二十名の陳姓をみな東螺街出身する根拠はないが、一度は分散した人々の再結集という理想的性格を帯びた可能性は高い。この聚星堂の建設の主導者のひとり陳紹年は、聚星堂に近い東螺溪右岸の沙仔崙を根拠としていた。

沙仔崙の東北に接する田中街の人々は、沙仔崙を「舊街」と呼ぶ。田中街はあそこから移ってきたのだという意味である。しかしながら、本研究において植民地期の地籍図と土地台帳および臨地調査によって復原した19世紀末の沙仔崙は、「街」とはほど遠い農村集落であり、しかも陳氏の同姓集落であった。これが、東螺街から離散した漳州勢のその後を物語る風景のひとつである。村の中心には媽祖を祀る「乾徳宮」があり、廟地を囲むように陳紹年とその一族の地所が集落中央を固めていた。彼らは1898年と99年の両年にわたる壊滅的な水害を契機に再度の移動を決断する。それはたんなる集落の移転ではなく、濁水渓谷口周辺の地域一円から人々を募り新たな都市を建設するプロジェクトだったことも本研究で明らかにできた。田中街が産声をあげるのは1901年頃だが、時代はすでに日本の植民地統治下であり、数年後には縦貫鉄道の濁水渓橋が完成し、田中街も鉄道街としての発展の道が開かれるのである。

4-4 都市の形態

田中街は台湾における漢人都市の最後の作品のひとつであった。陳紹年らは、八堡圳に沿って一帯の大地主から農地を購入し、市街北端に廟地をとり、廟前から南下する街路に店地をはり付け、これを東西から包み込むように地主層の邸宅を配した。1919年には、あらかじめ確保されていた廟地に沙仔崙から乾徳宮が移され街は完成するが、このとき祖先が東螺街を出て120年以上がたっていた（棄てられた沙仔崙には周辺農民が流入した）。

寶斗の場合、奠安宮（媽祖廟）を南面させ、廟前を東西に走る大街に町屋市街を伸ばし、その背後に邸宅を配した。廟から南へ伸びる宮前街にも町屋が配されたが、これは東螺溪の棧橋に伸びる市街である。西螺でも福興宮（媽祖廟）前の東西大街に沿って町屋市街が伸び、その背後に邸宅を配した。棧橋は大街の東端が河川敷に下った先にあった。林杞埔では連興宮（媽祖廟）を西面させ、その正面すなわち西に伸びる街路に沿って町屋を並べ、その背後に邸宅があった。

要するに、中心廟を基準に、その左右もしくは前方に市街を発達させ、邸宅は市街背後に置くというのが、例外はあるがおよその共通項であり、河港がこれに付随する場合の変奏がある。福建省沿岸部の伝統的な商業市街も似ているが、異なるのは、本研究で扱ってきたこれら都市が比較的新しく、プランが整然としている点である。水害・械闘等で破壊と再生、分裂や移動を繰り返したことが影響したのであろう。これを微差とみることもできるが、台湾の大地や気象のなかで、反政府武装蜂起とその鎮圧、集団間抗争の激化を通して進む秩序形成といった歴史的特質を踏まえれば、都市の整然たる形態は漢人たちの台湾への土着化の性格を物語るといえよう。

対して鹿港は、不動のまま資本を都市に蓄積し、いわば台湾の泉州というべき大陸的な伝統都市であり、廟と大街と邸宅群を河道に沿って配した「八郊」(商人団体)の集落が接続している。こうした鹿港の特質をかつて林會承は多核複合都市と形容した。

永靖には、嘉慶18年（1811）の建街契約書が残る。本研究ではこれを詳細に検討した。契約書は、建街の背景・理念、三山国王廟の創立運営、店屋の屋根葺材、道路の幅員と管理、市街各部の地割と税、都市全域の土地管理体制、店地の管理、道路・竹圍・溝などの管理・修繕、公的財産の造成と運用、業主(地主)への地代の支払い、土地の台帳管理、建街のため購入した水田の面積と契約、都市の共有地、将来の学校建設、店地への開発投資と建設の現状、近い将来の水路開削について記している。つづけて、この都市の開発と運営に当たる主体をめぐる記述が続くのだが、なかでも重要なのは6グループに構成された出資者集団であり、それが廟の前面を左右に伸びる道に沿った店地を配当され、また共有資産の管理運営を分担したのである。

他の都市については同様の史料がないが、寶斗の建街碑には建街の事由や建街指導者の名前が記されており、整然たるプランから考えても同様の契約書が作成されたと考えるのが自然で

ある。田中街の場合も、たとえ陳紹年ひとりの存在感が大きくとも、地主からの土地の購入や権利関係の整理、建街時に集まった参加者たちとの諸関係の規約はやはり必要であったろう。

4-5 産業化と領域再編

濁水河流域の植民地産業化をみるとき最も重要な糖業は、一面では甘蔗栽培農業であり、他面では工業である。工場は製造過程で大量の冷却水を必要とするため河川や埤圳に近い立地を求め、農地からの原料搬入、工場から主要駅までの製品搬出のために軽便鉄道網の整備を必要とした。また各製糖会社は原料採取区をもつ。これらが製糖業の領域編成上の特質である。

従来、植民地台湾の糖業については昭和期の四大製糖会社の経営史的研究の蓄積がある。しかし本研究では、地図と空中写真を活用して製糖工場と社宅街を悉皆的に把握し、またとりわけ新聞資料を用いて植民地前半期、とくに1905～1912年頃のプロセスを詳細にあとづけた。これが商人資本的領域から産業資本的領域への再編過程を検討するうえで重要な時期だからである。

濁水溪北岸（すなわち西螺溪以北）では、**1905～07**年に改良糖廠が出揃う。その最初が北斗（寶斗）の林慶岐を代表とする泉州系出資者グループによる北斗製糖で、彼らは溪州庄に原料採取区設定を認められる。東螺溪以北の地域にも複数の原料採取区が設定されているが、これらはすべて旧式糖廠所在地で改良糖廠を稼働させるものであった。出願者はいずれも地域の有力者、土地所有を基盤とする商人資本を背景に植民地初期に公職を歴任するような経歴をたどる人々である。**1907**年までにはこうした改良糖廠が出揃う。**1909**年には、板橋林家の林本源製糖が、北斗製糖と台南のペイン商会の原料採取区に取って代わり、改良糖廠と新式工場の平行稼働から、輸送インフラ整備とともに新式工場に一元化するが、大水害（**1910,11**）や原料調達をめぐる農民との抗争（二林事件、**1923-25**年）をへて、**1929**年に日本資本の鹽水港製糖に買収される。これが西螺溪-東螺溪間の主な動きだが、東螺溪北岸では辜顯榮の勢力拡大から明治製糖による買収（**1920**）に至る。

各々のテリトリー（原料採取区）内部および縦貫鉄道駅は軽便鉄道でつながれるが、大河川を超えるは困難であり、植民地期の産業資本的な領域レジームは、主要河道間を各企業が一色に塗りつぶす趨勢を示す。**1910～20**年代にはまた、総督府直営の大規模な治水工事で東螺溪が締め切られ、その広大な河川敷が浮覆地となって甘蔗農地に転換されていった。この頃から、製糖工場・社宅・組合等を核とする「糖業都市」の形成も進む。本研究では事例として溪州の調査を行った。そこでは漢人農村から林本源が取得した広大な土地が、鹽水港製糖所屬地に転じ、そこに地割りをして市街化が図られた。戦後土地売買が進み、市街北端に媽祖廟も置かれたため漢人都市然としているが、紛れもない植民地産業都市であった。

大きく俯瞰しなせば、河川の流路＝線に沿った商人資本の領域レジームに対し、原料採取区＝面において農業・工業・交通・土地不動産を経営する産業資本のレジームである。だが、その橋渡しは、**19**世紀までに成長した漢人商人資本によって担われたのである。

なお、林爽文事件以後に激化した械闘も**19**世紀後半には落ち着いていた。ただ、植民地初期の濁水河流域では雲林に拠点をもつ反乱勢力の活動が激化した時、その投降工作に協力したのは林杞埔の林月汀や田中の陳紹年ら漳州系の有力者たちだった。林月汀は竹山庄長等を歴任し、樟腦等の山地資源開発の利権を得ているし、陳紹年も田中庄長をつとめ、新設の田中街は鉄道街として隆盛する。対して泉州系商人は、改良糖廠に出資して日本企業の花道を用意した後、流通インフラの転換によって彼らの都市が衰退するのを見届けることになる。

4-6 都市建築の構法学的変容

都市建築がドラスティックな変容をはじめるときの頃である。彰化では1904年に公示された市区計画によって市区改正（都市改造）がゆっくりとではあるが進捗していた。鹿港、北斗、西螺、林杞埔などでも時期はさまざまだが都市改造が進められていく。

本研究では、実測調査とともに土地台帳や建物登記簿などの土地行政資料を活用して、この都市改造以前の都市景観を復元的に把握してきたが、西螺、北斗、林杞埔など、ほぼすべての都市の町屋はかつて安価な竹造であった。北斗の場合などは水害頻発による破壊と再生の反復もその背景に見ておく必要がある。ただ鹿港だけは、伝統的な石と磚（煉瓦）、杉丸太、瓦などを対岸からバラストとして輸送し、泉州などと変わらぬ都市景観を整えていた。これが本報告で述べてきた商人資本段階の領域レジームが内包した階層構造を物語るといえるだろう。

しかし、すべての都市で1920～30年代に竹造町屋が建て替えられ、林杞埔や社寮など中山間地域から谷口のエリアでは木造に、平野部では洋式煉瓦造に変貌する。前者は阿里山等の木材資源の開発、後者は植民地初期からの煉瓦製造が植民地政府の土木事業や官公署施設から民生化される段階を、それぞれ背景としていた。ただ北斗で多くの竹造街屋が1960-70年代まで残された事実は、経済的地位の後退を物語るといえよう。このように、都市景観を構成する町屋の材料・構法学的な特徴にも、領域的レジームの転換はよく反映されるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 青井哲人（張亭菲訳）	4. 巻 104
2. 論文標題 竹子城鎮：臺灣濁水溪流域の内陸河港城鎮群與竹造街屋の歴史意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 建築學報	6. 最初と最後の頁 103-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻原万規彦・角哲	4. 巻 57-3
2. 論文標題 大縮尺の都市地図を用いた戦前期樺太における真岡の変容の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 605-608
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 辻原万規彦・今村仁美	4. 巻 第737号
2. 論文標題 戦前期の沖縄における製糖工場とその建設が地域に与えた影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 pp.1859 ~ 1869
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Makihiko TSUJIHARA, Akihito AOI and Satoru KAKU	4. 巻 -
2. 論文標題 The Fire Insurance Maps of Taiwan and Sakhalin owned by the Chiyoda City's Hibiya Library & Museum	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings of the 2017 Pacific Neighborhood Consortium Annual Conference and Joint Meetings (PNC)	6. 最初と最後の頁 pp.150-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻原万規彦・角哲	4. 巻 第57号・3〔計画系〕
2. 論文標題 戦前期における樺太の大縮尺都市地図の収集と整理	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 pp.677～680
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 辻原万規彦・角哲・青井哲人	4. 巻 第53号
2. 論文標題 日比谷図書文化館所蔵の樺太・台湾・旭川の火災保険特殊地図	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本建築学会技術報告集	6. 最初と最後の頁 pp.302～308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.3130/aijt.23.303	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉本まり絵 青井哲人・河野紗輝・今進太郎・寺内達也・保川あづみ・相川敬介・武田峻哉・陳穎禎・辻原万規彦・恩田重直
2. 発表標題 台湾濁水渓流域中継港 西螺 の成立・展開・変容 その1 漢人入植と商業街としての成立・発展
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺内達也 青井哲人・河野紗輝・今進太郎・杉本まり絵・保川あづみ・相川敬介・武田峻哉・陳穎禎・辻原万規彦・恩田重直
2. 発表標題 台湾濁水渓流域中継港 西螺 の成立・展開・変容 その2 日本植民地期における市街地の拡大・変容
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 保川あづみ 青井哲人・河野紗輝・今進太郎・杉本まり絵・寺内達也・相川敬介・武田峻哉・陳穎禎・辻原万規彦・恩田重直
2. 発表標題 台湾濁水渓流域中継港 西螺 の成立・展開・変容 その3 1930年代市区改正以前・以後の延平路街頭
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田峻哉 青井哲人・河野紗輝・今進太郎・杉本まり絵・寺内達也・保川あづみ・相川敬介・陳穎禎・辻原万規彦・恩田重直
2. 発表標題 台湾濁水渓流域中継港 西螺 の成立・展開・変容 その4 1920年代以降の延平路街尾の開発形態
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻原万規彦・青井哲人・角哲
2. 発表標題 『戦前期外地火災保険特殊地図集成』について
3. 学会等名 平成30年度日本地図学会定期大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻原万規彦・角哲
2. 発表標題 戦前期における樺太の大縮尺都市地図の概要
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中井希衣子・青井哲人・恩田重直・陳穎禎・芦谷龍征・富山大樹・西恭平・杉本まり絵・河野紗輝・今進太郎・寺内達也・保川あづみ
2. 発表標題 19世紀台湾彰化縣における永靖の建街に関する研究 その1：「永靖建街契約書」の構成と内容
3. 学会等名 日本建築学会大会（中国）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 芦谷龍征・青井哲人・恩田重直・陳穎禎・中井希衣子・富山大樹・西恭平・杉本まり絵・河野紗輝・今進太郎・寺内達也・保川あづみ
2. 発表標題 「永靖建街契約書」に示された計画の復原」
3. 学会等名 日本建築学会大会（中国）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 今進太郎・青井哲人・恩田重直・陳穎禎・芦谷龍征・中井希衣子・富山大樹・西恭平・杉本まり絵・河野紗輝・寺内達也・保川あづみ
2. 発表標題 19世紀台湾彰化縣における永靖の建街に関する研究 その3：出資者グループと店地所有の関係
3. 学会等名 日本建築学会大会（中国）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 富山大樹・青井哲人・陳穎禎・芦谷龍征・中井希衣子・西恭平・杉本まり絵・河野紗輝・今進太郎・寺内達也・保川あづみ・白佐立
2. 発表標題 台湾彰化縣二水郷市街地の形成・変容に関する研究 その1：濁水渓流域における二水の歴史的・地質的特質
3. 学会等名 日本建築学会大会（中国）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西恭平・青井哲人・陳穎禎・芦谷龍征・中井希衣子・富山大樹・杉本まり絵・河野紗輝・今進太郎・寺内達也・保川あづみ・白佐立
2. 発表標題 台湾彰化縣二水郷市街地の形成・変容に関する研究 その2：二水市街地の空間構成
3. 学会等名 日本建築学会大会（中国）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉本まり絵・青井哲人・陳穎禎・芦谷龍征・中井希衣子・富山大樹・西恭平・河野紗輝・今進太郎・寺内達也・保川あづみ・白佐立
2. 発表標題 台湾彰化縣二水郷市街地の形成・変容に関する研究 その3：都市組織を構成する建造物
3. 学会等名 日本建築学会大会（中国）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 辻原万規彦・今村仁美
2. 発表標題 戦前期の製糖工場の立地の選定と周囲に与えた影響 - 沖縄製糖嘉手納工場を例に -
3. 学会等名 日本建築学会大会（中国）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 青井哲人・弓削多宏貴・門間翔大・関根薫・祐川牧子・小見山滉平・芦谷龍征・富山大樹・池田薫・白佐立
2. 発表標題 植民地産業化に伴う台湾濁水河流域の変化と都市形成 その1：濁水河流域の地形・行政区域・都市立地パタンの歴史的変遷（18c～1920）
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 弓削多宏貴・青井哲人・門間翔大・関根薫・祐川牧子・小見山滉平・芦谷龍征・富山大樹・池田薫・白佐立
2. 発表標題 植民地産業化に伴う台湾濁水渓流域の変化と都市形成 その2：溪州におけるインフラ整備と製糖工場の進出
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 門間翔大・青井哲人・弓削多宏貴・関根薫・祐川牧子・小見山滉平・芦谷龍征・富山大樹・池田薫・白佐立
2. 発表標題 植民地産業化に伴う台湾濁水渓流域の変化と都市形成 その3：製糖会社進出にともなう溪州の市街地形成と社会変容
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 関根薫・青井哲人・弓削多宏貴・門間翔大・祐川牧子・小見山滉平・芦谷龍征・富山大樹・池田薫・白佐立
2. 発表標題 植民地産業化に伴う台湾濁水渓流域の変化と都市形成 その4：溪州市街地への住民流入と都市組織の更新に関する臨地調査
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 辻原万規彦・角哲・青井哲人
2. 発表標題 千代田区立日比谷図書文化館所蔵の火災保険特殊地図の概要
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 辻原万規彦・今村仁美
2. 発表標題 戦前期の沖縄に建設された機械式製糖工場の立地と地域の発展に与えた影響
3. 学会等名 日本建築学会九州支部研究発表会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 青井哲人, 弓削多宏貴, 門間翔大, 関根薫, 小見山滉平, 祐川牧子, 芦谷龍征, 池田薫, 富山大樹, 白佐立
2. 発表標題 植民地産業化に伴う台湾濁水渓流域の変化と都市形成 その1 濁水渓流域の地形・行政区域・都市立地パタンの歴史の変遷(18c~1920)
3. 学会等名 日本建築学会大会(九州)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 弓削多宏貴, 青井哲人, 門間翔大, 関根薫, 小見山滉平, 祐川牧子, 芦谷龍征, 池田薫, 富山大樹, 白佐立
2. 発表標題 植民地産業化に伴う台湾濁水渓流域の変化と都市形成 その2 溪州におけるインフラ整備と製糖工場の進出
3. 学会等名 日本建築学会大会(九州)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 門間翔大, 青井哲人, 弓削多宏貴, 関根薫, 小見山滉平, 祐川牧子, 芦谷龍征, 池田薫, 富山大樹, 白佐立
2. 発表標題 植民地産業化に伴う台湾濁水渓流域の変化と都市形成 その3 製糖会社進出にともなう溪州の市街地形成と社会変容
3. 学会等名 日本建築学会大会(九州)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 関根薫, 青井哲人, 弓削多宏貴, 門間翔大, 小見山滉平, 祐川牧子, 芦谷龍征, 池田薫, 富山大樹, 白佐立
2. 発表標題 植民地産業化に伴う台湾濁水溪流域の変化と都市形成 その4 溪州市街地への住民流入と都市組織の更新に関する臨地調査
3. 学会等名 日本建築学会大会(九州)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 辻原万規彦, 角哲, 青井哲人
2. 発表標題 千代田区立日比谷図書文化館所蔵の火災保険特殊地図の概要
3. 学会等名 日本建築学会大会(九州)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 CHEN Yu, ONDA Shigenao	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ON-LABO LLP	5. 総ページ数 22
3. 書名 The Sound of Love: Teng Mah Seng House in Quanzhou (念慈: 泉州丁馬成故居)	

1. 著者名 CHEN Yu, ONDA Shigenao	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ON-LABO LLP	5. 総ページ数 175
3. 書名 Lim Loh Family: The Journey Home (林路家族: 帰途)	

1. 著者名 辻原万規彦・青井哲人（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 柏書房	5. 総ページ数 282
3. 書名 戦前期外地火災保険特殊地図集成 戦前期台湾火災保険特殊地図集成 -台南・嘉義・高雄・屏東・花蓮港	

1. 著者名 辻原万規彦・角哲（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 柏書房	5. 総ページ数 250
3. 書名 戦前期外地火災保険特殊地図集成 戦前期樺太火災保険特殊地図集成-付・樺太庁発行市街図・旧版海図ほか	

1. 著者名 辻原万規彦・青井哲人（編集）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 柏書房	5. 総ページ数 252
3. 書名 戦前期外地火災保険特殊地図集成 戦前期台湾火災保険特殊地図集成 -台北・基隆・台中・彰化	

1. 著者名 辻原万規彦・青井哲人（編集）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 柏書房	5. 総ページ数 282
3. 書名 戦前期外地火災保険特殊地図集成 戦前期台湾火災保険特殊地図集成 -台南・嘉義・高雄・屏東・花蓮港	

1. 著者名 日本植民地研究会（編集）（共著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 308
3. 書名 日本植民地研究の論点	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	辻原 万規彦 (Tsujiyama Makihiko) (40326492)	熊本県立大学・環境共生学部・教授 (27401)	
研究分担者	高村 雅彦 (Takamura Masahiko) (80343614)	法政大学・デザイン工学部・教授 (32675)	
研究協力者	恩田 重直 (Onda Shigenao)	法政大学・エコ地域デザイン研究所・研究員 (32675)	